「異文化感受性発達尺度(The Intercultural Development Inventory)」の日本人に対する適用性の検討：日本語版作成を視野に入れて[1)]

山本　志都※　丹野　大※

1. はじめに

日本人が海外へ行く機会は、ビジネス、旅行、留学、海外駐在など様々な形をとりながら増えつづけている。一方、国内でも、海外からの移住者や留学生の増加はもちろん、地域間の流動性が高まったり、価値観の多様化がすすみ、世代間でも互いの違いを強く感じるなど、多様性について意識する機会が増えている。また、転職や企業間の合併の増加に伴い、これまでとは異なる組織文化や、そこでのコミュニケーションに対応する、適応の迅速さが求められている。職場では正社員とパートタイム労働者が混在する状況が拡大傾向にあり、女性や外国人労働者の雇用も増加している。認識や価値観などにおいて文化的に異なる背景をもつ他者の存在により、コミュニケーションは国内でも多様化している。近藤（1997）は異文化コミュニケーションが今後一層、「日常のコミュニケーションの一般的な形態」となることを予測している。文化的背景の異なる人同士の接触を前提としたコミュニケーションを考えることが、以前にも増して重要となっているのである。

異文化コミュニケーションを円滑に行うためには、異文化コミュニケーション能力(Koester et al, 1993; Martin, 1993; 久米, 1997)、異文化間能力（Ruben, 1989; 山岸, 1995)、異文化リテラシー（山岸, 1997）等と呼ばれる能力の育成が必要といわれる。これらの能力を構成する要素には幾つかあり、その１つに異文化感受性が挙げられる。このため、異文化トレーニングや異文化コミュニケーション教育において、異文化感受性を高めたり、その発達を促すことが、重要視されている。異文化感受性の研究では、トレーニングや教育など実践の場で活用することを目的に、個人の異文化感受性レベルの査定や、プログラムの効果測定など、異

1）IDIに関する助言を頂いたMilton Bennett博士、翻訳に協力を頂いた町恵理子教授（麗澤大学）とMary Tamaru講師（麗澤大学)、および東京でのデータ収集に協力を頂いた境睦助教授ならびに末田清子助教授に深く感謝の意を表します。本研究は青森公立大学からの共同研究助成金（平成12年度）のもとになされた。

※青森公立大学

文化感受性を測定する尺度が、アメリカ合衆国の研究者達によって開発されており、BehawukとBrislin（1992）およびBennett（1986a, 1986b, 1993）の論文が代表的である。

本稿では、HammerとBennett（1998）によって開発された「異文化感受性発達尺度（The Intercultural Development Inventory, IDI）」の日本人への使用について、その適用性を調査した結果を報告する。IDIは、米国のコンサルティング会社で、海外派遣前トレーニングやリーダーシップ・トレーニングに使用されたり、教育機関において、プログラム査定や海外留学した学生の評価等に活用されて、その有用性を認められている。日本では、IDIの基盤となったBennett（1986a, 1986b, 1993）の「異文化感受性発達モデル（The Developmental Model of Intercultural Sensitivity, DMIS）」が、異文化コミュニケーション研究者や教育者によって広く知られている。DMISは異文化適応・異文化間能力・異文化トレーニングとの関連から、日本でも様々に紹介され、教育への応用が検討されている（林, 1994; 森, 1997; 山岸, 1997; 八代その他, 1998; 青木, 1999; マツモト, 1999; 宮原, 2000）。Bennettによると、IDI使用のための他言語への翻訳のうち、現在最も要望されているのは、日本語への翻訳であるという（私信, 2001年3月25日）。しかしながら、このような尺度は有益である反面、米国で開発された尺度を用いる場合、全ての指標が必ずしも日本人の文化的概念や感受性を反映したものではない可能性があるため、適用には注意が必要となる。DMISの日本人への適用性については、部分的に修正を必要とするという調査報告（山本, 1998）もある。IDIの日本語版を作成するためには、翻訳の妥当性が吟味されると同時に、日本人への適用性についても検証されるべきである。日本人を対象としたIDIの使用は、米国多国籍企業の日本人マネジャーに対する異文化トレーニング等で、既に原文（英語）を用いて行われているが、その適用性はいまだ調査がなされていない。本研究は、IDIを日本語に翻訳し、日本人を対象としてテストした場合の適用有効性の検討を試みる。

2. 異文化感受性発達尺度（The Intercultural Development Inventory, IDI）

IDIは個人の異文化に対する感受性の発達度を測定する尺度である。Bennett（1986a, 1986b, 1993）の提示した「異文化感受性発達モデル（The Developmental Model of Intercultural Sensitivity, DMIS）」を基に、HammerとBennett（1998）により開発された。彼らはIDIの定義を「他の社会的／文化的集団の人々と自分自身との間にある文化的差異に対応する時、どのように人は自分の社会的世界の構築を行っているか、ということに焦点をあてた自己評価用査定ツール」としている。更に、IDIは「Bennettの異文化感性発達モデルにもとづいた、文化的差異に対する６つの志向性を、経験的に計測する60項目からなる記入式調査テスト」であると説明している。彼らによると、IDIは、7段階尺度による60の質問項目に対する被験者の回答結果を用いることで、被験者の文化的差異に対する、6つの志向性を測定

するという。また、IDIを用いて、被験者の文化的な違いや異質性に対する感受性のレベルが、6段階からなる発達段階のどの辺りに位置するのか、その発達状況を個人単位、または、集団・組織単位で、プロファイルし査定することができるとされている。その際にIDIの実施者は、DMISの概念を理解した上で測定を行い、異文化感受性発達状況の査定をする必要があるとされている。以下に、DMISの概略とその各発達段階、IDI作成の過程とDMISとの関連、そしてIDIとDMIS、それぞれの6つの段階の関係について述べる。更に、IDIの応用可能性についても言及したい。

2.1 DMISの概略

IDIの基礎となるDMISは、認知心理学の立場から現象学と構成主義の概念を軸に構築されている（Yamamoto, 1996）。モデルにおける各発達段階は、それぞれの段階において、文化的な違いについての個人の認知構造がどのように表われるかを示すもの、とされている。ある事柄を文化的差異として認知するか否か、また、それは自分の世界観上どのように位置づけられるのか等、個人の異文化体験に関わる認識体系の複雑さが異文化感受性として捉えられている（Hammer & Bennett, 1998）。

モデルは6つの段階から成り、大きく前半3つの段階を自文化中心的段階、後半3つの段階を文化相対的段階と分けることができる。6つの段階には、それぞれの段階の中に、更に異なる形態を表す下位カテゴリーがある。自文化中心的段階では自分の文化が現実の中心である。一番初めの「否定」の段階では、自分の文化が自分にとって唯一の現実であり、異質なものからは心理的・物理的距離を保つことでその存在を避けている。「防衛」の段階では、自分の文化が唯一絶対正しい経験であり、文化的に異質なものは否定される。「最少化」の段階では、自分の世界観が普遍的なものとして経験されるため、表面的な違いを受け入れつつも、他の文化も深い所では本質的に自分の文化と違わないものと考える。文化相対的段階に異文化感性が発達していくと、自分の文化を他の文化の文脈から体験することができるようになる。「受容」では、他の文化は自分のものと同じくらい平等に複雑なものだが、現実構築のあり方が異なるのだということを受け入れる。「適応」では、他の文化の世界観に自分の見方を切り替えることができるようになり、自分自身の経験の中にも他の文化の人が体験するようなものが含まれてくる。「統合」では、自分の中の「自己」という経験が拡大され、その経験の中には、自文化と他文化との世界観の間を往来するという動きが含まれるようになる（Hammer & Bennett, 1998）。

The Developmental Model of Intercultural Sensitivity （DMIS）

異文化感受性発達モデル

自文化中心的段階			文化相対的段階		
違いの否定	違いからの防衛	違いの最少化	違いの受容	違いへの適応	違いとの統合
隔絶　分離	侮蔑　優越　逆転	身体的普遍性　超越的普遍性	行動の違い尊重　価値の違い尊重	共感　多元主義	文脈上の評価　建設的マージナリティ

［Milton Bennett,（1993）より作成］

このモデルの想定においては、「各段階に特徴的な態度や行為は、あくまでもその認知構造と個人の世界観に付随して現れているもの」と考えられている。したがって、態度や行動の変化を記述するという目的よりは、認知構造の発達を示すモデルであることが強調されている。また、各段階ごとに特徴的な態度（例：他の文化を見下して、自分達のやり方が最も正しいと信じる）は紹介されているものの、そのような態度や行動の変化といった表面上の変化を説明するためのモデルと考えるより、そういった態度や行動がいかなる世界観から表出されるのか（例：文化的差異を認知したことにより、自分が唯一絶対と信じる世界観が脅かされ、防衛メカニズムが働く）、段階を追って発達する過程を示すものと考える方が適切である。

2.2　IDI

Hammer（1999）によると、IDI作成はDeVellis（1991）のスケール構築のガイドラインに従って行われた。初めに、リサーチ・チームは、様々に異なる文化的背景を持つ40名の人々を対象に深層面接調査を行い、その内容を面接記録としてテキスト化した。4名のコーダーが、それぞれ独自に、40の面接記録のうち25の記録について、各面接記録に見られる異文化感受性レベルを、DMISの6つの段階ならびにその下位カテゴリー（各段階に見られる形態）を用いて評価した。各コーダーが評価した異文化感受性レベルについて、コーダー間の信頼性が、25全ての面接記録について測定され、高い値を得た（.87以上）。DMISは異文化感受性を測定するのに信頼できるモデルと判断され、DMISの6つの段階ならびにその下位カテゴリーを用いて、面接記録を基に質問項目を作成する作業が行われた。このとき、文化的背景の異なる人々が文化的違いを同じように表現するわけでない、という点に留意し、コーダーが異文化感受性レベルを評価するのに用いた、DMISを反映していると認識された被験者の発言記録を用いて、予備調査の質問項目作成を行い、質問項目が作成者からの押し付けとならないよう配慮

した。当初の質問項目は2度のパイロット調査を経て調整され改訂された。その後、7名の異文化専門家のエキスパート・パネルを対象とした調査により、質問項目の信頼性と妥当性が検討された。更に、312名を対象に調査を行い広範な統計分析を行った結果、IDIの6つの段階が定められ、それぞれの段階に対して10の質問項目が選定された。IDI作成のより詳しい説明については、HammerとBennett（1998）を参照されたい。

IDIによる異文化感受性発達レベルの測定は質問紙を用いて行われるが、異文化感受性発達度の最終的な査定は、測定結果と、IDIを受けた人達への面接調査の結果を組み合わせて行われる。IDIの測定結果は数値で表され、そこから異文化感受性発達度を読み取ることは可能であるが、HammerとBennettはその結果だけに頼らず、面接（もしくは電話でのインタビュー）結果と合わせて、総合的に解釈し査定することを勧めている。彼らはIDIの出版と同時に、年に2回ほどのIDIセミナーを開講して、DMISの説明と、IDIを用いた質問紙テストとその結果の分析法、加えて面接による質的データ収集法と、異文化感受性発達度を総合的に判断する訓練を受講者に行っている。現時点においては、このセミナーを受講して実施資格を得ないとIDIを実施できないという制限があるが、彼らはその理由を、実践者としての立場から、IDI実施者が正確に査定を行うことを重視するためとしている。

2.3　IDIの6つの発達段階とDMIS

HammerとBennettはIDIの6つの段階をDMISと全く同じものとは見なさず、DMISの各段階を反映させたものとしている。DMISの「統合」の段階は、調査の結果、それ自体が独立して明確に定義付けられる段階として確立されなかったため、IDIによる測定の対象外となった。ただし「統合」の下位カテゴリーである「文脈上の評価（Contextual Evaluation）」は、DMISの「適応」の下位カテゴリーである「共感（Empathy）」と、その理論構築が著しく似通っていたため、そちらに含まれて「認知適応（Cognitive Adaptation）」の段階と名づけられた。また、DMISにおける「適応」のもう一つの下位カテゴリー、「多元主義（Pluralism）」は、「行動適応（Behavioral Adaptation）」の段階としてIDI上に反映されている。

Intercultural Development Inventory（IDI）の6つの発達段階

否定	防衛	最少化	受容	認知適応	行動適応
隔絶・分離 無関心	優越 侮蔑	普遍的価値 人間的類似性 違いの表面性	価値相対性 違いを学習 違いを楽しむ 違いの描写	文化間の橋渡し 枠組み転換 多重視点	文化的複雑性 行動転換

［HammerとBennett（1998）に基づいて作成］

2.4 IDIの応用可能性

Hammer（1999）はIDI作成の動機を、異文化間教育者、カウンセラー、研修講師、外国人学生アドバイザー、国内の多様性研修の担当者など、多岐にわたる仕事に携わる人々の要望に答えるためと述べている。そして、次の場面のような例を挙げ、IDI活用の可能性について言い及んでいる。1）海外赴任者とその家族のため事前研修を行う、2）社内での多様性（diversity）プログラム開発担当者が、開発の目安として、社内の異文化感受性レベルのデータが欲しい、3）文化的違いの効果的なグローバル・マネジメントが鍵となる、組織改革を行った後のマネジメント・チームへの効果を査定したい、4）大学で文化多様性に関する科目群を1年生の必修科目に加えたが、この効果を査定したい、5）文化的多様性の高いコミュニティの福祉事業において、スタッフと地域社会の人々との関係改善のために異文化感受性を高める異文化トレーニングを行いたい、等々である。実際にIDIセミナーには、企業の人事担当、研修会社のプログラム開発担当、コンサルタント、大学の留学や多様性プログラム担当者、異文化コミュニケーション研究者などが参加しており、これらの分野において興味が持たれ、その活用が期待されていることを示している。

IDIは個人の資質を測るというよりは、その時点における異文化感受性の発達の程度を示すものであるので、留学、異文化トレーニング、組織改革、海外赴任などが個人に与えた影響を、事前と事後で測定し比較するためのツールとして適切と言えるだろう。IDIを使用した個人の異文化感受性発達の事前調査は、異文化トレーニングや教育を実施する前のニーズ・アセスメントとなるので、それにもとづいたプログラム内容やレベルの調整を行うことが可能となる。また、トレーニングや教育の中で、個人が自分の異文化感受性レベルを自己評価し認識することに役立ち、必要な態度やスキルの育成をフィードバックしてもらうための助けとなる。事後測定は、プログラムや改革などを評価するのに有益である。事前測定と併せて行うとプログラムの効果測定にも役立つだろう。

IDIをニーズ・アセスメントとして活用することを考えてみると、その一例として異文化トレーニングや異文化コミュニケーション科目のプログラムを開発する時に、その内容と配列を考慮し決定することに有用と考えられる。IDIをニーズ・アセスメントとして使用すると、参加者の異文化感受性の発達度を把握することができる。この情報はプログラム内容を考えることに役立つであろう。その理由は、プログラム参加者が、文化的差異を意識する機会や経験が多くて、異文化感受性が比較的発達している可能性のある参加者である場合と、そうでない場合とでは、プログラム内容やそれに対応するトレーニング法、および全体の流れに関わる各単元の配列が違ってくるからである。例えば、帰国子女や留学・海外赴任などの海外経験者、国際結婚をしている人、外国人と接する機会の多い仕事に就く人、国内でも年代や住地域の異なる相手と緊密なコミュニケーションをする必要がある仕事をしている人達の場合と、海外経験や外国人との接触経験、国内の多様性について意識したり深く考えたりした経験等があまり無い参加者との場合である。BrislinとYoshida（1994）は、異文化トレーニングが失敗する可

能性のある、２つの場合を挙げている。1つめは、参加者にとって基礎的すぎる内容や方法を使用することで、参加者を退屈させ、やる気や興味を失わせてしまう場合である。2つめは、異文化感受性が発達した人に適したトレーニングやエクササイズを、比較的未発達な参加者に対して使用した結果、参加者の学習と感情に必要以上の試練を与えてしまう場合である。参加者は不快感や怒りを感じてしまい、その結果、否定的なステレオタイプを助長したり、文化の異なる人々との接触を避けてしまうようなことにもなりかねない。異文化感受性の発達状況について、自文化中心的段階の「否定」の段階にあるメンバーを中心として構成される集団と、主に文化相対的段階の「受容」の段階にあるメンバーから構成される集団では、トレーニングや教育が全く同じのままでは、大きな効果を期待できないであろう。「否定」の段階にある参加者に文化的価値観の比較をさせたり、異文化接触で起こり得るコミュニケーション問題について考えさせようとしても、絵空事や他人事のように思えてしまう故に、自分との関係性を何も見出せないままでいるかもしれない。「防衛」の段階にある参加者であれば、文化的価値観の比較の中から、自分になじみのない価値観を否定的に見たり、コミュニケーションの問題は相手に非があるものと考えて、異文化接触を面倒なものと捉えてしまうかもしれない。不用意に異文化比較をしたり、文化的背景の異なる相手とのコミュニケーションを奨励することが、逆効果を生む可能性をはらんでいるのである。このような反応は、異文化感受性発達と照らして、一時的なものとしてファシリテートできれば、参加者の異文化感受性発達の助けともなろうが、何もフォローを行わなければ、そのまま異文化に対して否定的態度を持ち続けることもあるであろう。反対に、「受容」の段階にある参加者は、より複雑な主観文化を学ぶことができるので、価値分析をしたり、文化比較をしながら、更に詳細な文化の違いのカテゴリーを学べるよう支援し、同時にそれに対処するためのスキルを学べるようにすることが必要となる。

最後にIDIの適用限度について述べると、この尺度の原文は英語で、他言語への翻訳はまだ実現していない。Hammer（1999）はIDIを受ける条件として、質問に答えるのに十分な英語能力が必要であるとしている。他言語への翻訳については、IDIの独自性と繊細さを理由に、HammerとBennettの承諾と指導無しに他の言語へ翻訳され使用されるべきではないとしている。日本語版を作成するにあたっても、単に翻訳するだけでなく日本人への適用性が確認されるべきであるが、本研究が調査するところはこの点にある。

3. 調査手続き

3.1 IDIの翻訳

本研究では、HammerとBennettの許可を得て原文のIDIを日本語に翻訳したものを使用することにした。翻訳の手続きとして、まず、日本語を母語とする日英バイリンガルの日本人研究者2名により、各自が独自に翻訳を行った。その後、それぞれの両翻訳間の差異を調整し、同

時に質問文中の語句の統一を行った。できる限り原文の意味を損なわぬよう、意味の不明確な個所はBennettに確認を取るなどの配慮をした。次に、IDI日本語訳は、英語を母語とする日英バイリンガルのアメリカ人研究者によって英語にバック・トランスレーションされた。最後に翻訳作業に携わった3者間の会議を2度にわたって行い、バック・トランスレーションと原文の間に違いが生じている部分を比較検討し、誤差が見られなくなるまで日本語訳を調整した上で、等価性の確認が行われた。

3.2 データ収集の過程と調査対象[2)]

データ収集は2000年6月に、青森公立大学内で男女の学生を対象としておこなわれた。そのあと、同年12月初旬に東京都内の私立大学2校において男女の学生を対象としておこなわれた。

青森：90人（男性＝54人、女性＝36人）、平均年齢＝18.9歳、標準偏差＝0.9歳

東京：81人（男性＝41人、女性＝40人）、平均年齢＝21.4歳、標準偏差＝1.4歳

4. 分析結果

収集されたデータの分析は、青森公立大学内に常備されているSASを使用しておこなわれた。使用された統計方法は、バリマックス回転による主因子法（Principal Component Factor Analysis）であり、とりわけその確認的因子分析（Confirmatory Factor Analysis）（Long, 1983）の形でおこなわれた。クロンバックのα係数（Cronbach's alpha）で表わされている内的整合性は、因子としての負荷が0.4以上である項目のみで計算されている（Kim & Mueller, 1978）[3)]。本研究において「$\alpha > 0.7$」である因子の抽出を試みた（Bohrnstedt & Knoke, 1988）が、全ての因子が「$\alpha > 0.7$」ではなかった。以下にその結果を記す（Table 1）。

第一段階「否定」（Denial Scale）

1. 「無関心」（Disinterest Items）

ここでは、青森サンプルと東京サンプルとも、項目37を除いた他の3項目（1、15、57）により一つの因子がつくられた。項目37はこの因子をつくるものではないことがわかった。これら4項目を詳細に比較した場合、そのことは、ある程度納得が可能である。3項目（1、15、57）が、「自己と外部でおこっていることの間に距離がある」ことを問う項目であるのに対し、項目37は、「自己の周囲にかぎられている」ことを問う項目である。

2）データの入力と分析は、丹野ラボの数納祥平によってなされた。

3）ただし一項目だけに負荷のかかっている因子のα係数の算出は行われていない（n.c., not calculated）。

2.「隔絶・分離」(Avoidance/Separation Items)

ここでは、青森サンプルと東京サンプルとも、項目14を除いた他の5項目（30、38、40、43、49）により一つの因子がつくられた。項目14はこの因子をつくるものとしては使用されないであろう。5項目（30、38、40、43、49）が、「異なる文化や見かけや行動をする人々を避ける」ことを問う項目であるのに対し、項目14は、「異なる文化間で住み分ける」ことを問う項目である。

第二段階「防衛」(Defense Scale)

3.「侮蔑」(Denigration Items)

ここでは、青森サンプルと東京サンプルとも、使用された5つの項目（10、20、28、41、44）の全てが、一つの因子をつくるものであることが確認された。

4.「優越」(Superiority Items)

ここでは、青森サンプルと東京サンプルとも、使用された5つの項目（11、46、39、55、56）の全てが、一つの因子をつくるものであることが確認された。

第三段階「最少化」(Minimization Scale)

5.「違いの表面性」(Superficial Items)

ここでは、青森サンプルと東京サンプルともに、使用された3つの項目（4、8、34）の全てが、一つの因子をつくるものであることが確認された。しかし、両サンプルでの低い内的整合性値（.41および.63）からして、指標としての使用の条件を満たすには至らなかった。

6.「人間的類似性」(Human Similarity Items)

ここでは、青森サンプルと東京サンプルともに、使用された3つの項目（6、22、51）の全てが、一つの因子をつくるものであることが確認された。しかし、両サンプルで得られた低い内的整合性数値（.22 および.52）からして、指標としての使用の条件を満たすには至らなかった。

7.「普遍的価値」(Universal Values Items)

ここでは、青森サンプルと東京サンプルとも、項目5を除く、3つの項目（12、23、59）が一つの因子をつくるものであることが分かった。項目5は、この因子をつくるものとしては使用されないであろう。第一因子の3項目（12、23、59）が、「私たち全ての根元が超自然で神聖な存在にある故の共通性」について述べているのに対し、項目5は、「人々が責任を負うべきところの共通の価値観や規範」について述べている。しかし、両サンプルで、ともに低い内的整合性値（.59 と.55）が示され、指標としての使用の条件を満たすには至らなかった。

第四段階「受容」(Acceptance Scale)

8. 「違いの描写」(Describing Difference Items)

ここでは、青森サンプルと東京サンプルとも、使用された2つの項目(32、33)が、一つの因子をつくるものであることが確認された。しかし、東京サンプルでの低い内的整合性値(.57)が示すように、指標として使用していくためには、改善の余地がある。

9. 「違いを楽しむ」(Enjoying Differences Items)

ここでは、青森サンプルと東京サンプルとも使用された3つの項目(17、29、47)が、一つの因子をつくるものであることが確認された。しかし、両サンプルでの低い内的整合性値(.51と.56)が示すように、指標としての使用の条件を満たすには至らなかった。

10. 「違いを学習」(Learning Differences Items)

ここでは、青森サンプルと東京サンプルともに、使用された2つの項目(19、27)で、一つの因子をつくることが確認された。しかし、両サンプルでの低い内的整合性値(.65と.36)が示すように、指標としての使用の条件を満たすには至らなかった。

11. 「価値相対性」(Value Relativity Items)

ここでは、青森サンプルと東京サンプルともに、3つの項目(2、21、48)が、一つの因子をつくることが確証された。しかし、東京サンプルでは低い内的整合性値(.38)が示されている。地域間やサンプル間での違いが示されている指標である。

第五段階「認知適応」(Cognitive Adaptation Scale)

12. 「多重視点」(Multiple Perspective Items)

ここでは、青森サンプルと東京サンプルともに使用された2つの項目(31、45)が、一つの因子をつくることが確認された。しかし、両サンプルでの低い内的整合性値(.08と.48)に示されるように、指標としての使用は再考を必要とするであろう。

13. 「枠組み転換」(Frame Shift Items)

ここでは、青森サンプルと東京サンプルともに使用された4つの項目(3、25、46、52)の全てが、一つの因子をつくるものであることが確認された。ただし改善の余地はあるであろう。

14. 「文化間の橋渡し」(Bridge Builder Items)

ここでは、青森サンプルと東京サンプルともに使用された4つの項目(18、24、53、60)の全てが、一つの因子をつくるものであることが確認された。ただし改善の余地はあるであろう。

第六段階「行動適応」(Behavioral Adaptation Scale)

15.「行動転換」(Behavioral Shift Items)

ここでは、まず青森サンプルと東京サンプルともに、項目7を除いた他の5項目(13、42、50、54、58)が第一因子をつくるものであることが発見された。項目7が、「文化間の意見や見方が違う」とのについて述べているのに対し、第一因子の5項目が、「自己のふるまいを、相手の文化にシフトさせる」ことについて述べている。しかし第一因子として残った5項目を一つの指標を計るものとして使用していくためには、低い内的整合性値(.55と.63)に示されるように、さらなる改善が必要であろう。

16.「文化的複雑性」(Cultural Complexity Items)

ここでは、青森サンプルにおいては、項目9と項目26により第二因子が出てきたが、青森サンプルと東京サンプルともに、使用された4項目(9、26、35、36)の全てが、一つの因子をつくるものであることが確認された。しかし低い内的整合性値(.61と.62)に示されるように、さらなる改善が必要であろう。

Table 1. IDI項目の因子分析結果

第一段階「否定」Denial Scale

1.「無関心」Disinterest Items

	青森	東京	
		第一因子	第二因子
1. 他の国々で何が起きているかについて注意を払いたいと切実に願う理由が私には分からない。	.74	.87	−.14
15. 国際問題を気にかけることは、私にとってあまり重要ではない。	.84	.90	.07
37. 私の周囲には、気にかけるに足るほどの文化的違いが実際にはない。	.33	.05	.99
57. 他の文化についてもっとよく学ぶ実際の理由なんてない。	.72	.55	.14
Eigen Value	1.87	1.88	1.01
内的整合性(Cronbach's Alpha)	.67	.67	(n.c.)

2.「隔絶・分離」Avoidance/Separation Items

	青森	東京
14. もし文化的に異なる集団が、自分たちだけでいてくれるなら、社会はもっとうまくいくだろう。	.38	.35
30. 私は、他の文化からきたように見える人々の側にはいたくない。	.70	.74
38. 私は自分と違ったふるまいをする他の文化の人々を避けている。	.78	.86
40. 私は異質な感じの人々を避けている。	.79	.78

43. 見かけの違う人々が物事を違ったやり方ですると、私はたいていその人たちと話をするのを避けようとする。	.77	.74
49. 文化の異なる人々とつきあうのはあまり好きではない。	.72	.75
Eigen Value	3.00	3.13
内的整合性（Cronbach's Alpha）	.81	.83

第二段階「防衛」Defense Scale

3.「侮蔑」Denigration Items

	青森	東京
10. 他の文化の人々は、私の文化の人々と比べると、一般的に怠け者である。	.74	.54
20. 一般的に、他の文化は、私の文化よりも劣っている。	.76	.84
28. 他の文化の人々は、私の文化の人々よりも文明が発達していない。	.79	.86
41. 他の文化の人々は、私の文化の人々よりも知性が低い。	.85	.83
44. 他の文化の人々は、私の文化の人々と比べると不正直である。	.72	.74
Eigen Value	2.97	2.97
内的整合性（Cronbach's Alpha）	.72	.81

4.「優越」Superiority Items

	青森	東京
11. 私の文化の人々は、他の文化の人々よりも洗練されている。	.82	.56
16. 私の文化の人々は、世界中のほとんどの文化よりも完璧に近い。	.80	.76
39. 私の文化の暮らし方は、世界の文化の規範になるべきだ。	.79	.75
55. 他の文化の人々は、私の文化の人々ほど心が広くない。	.81	.83
56. 世界の他の国々は、彼らの問題を解決する答を、私の文化に期待すべきだ。	.62	.83
Eigen Value	3.05	2.83
内的整合性（Cronbach's Alpha）	.83	.80

第三段階「最少化」Minimization Scale

5.「違いの表面性」Superficial Items

	青森	東京
4. 外見上の違いがあるにも拘らず、人はみな同じものである。	.85	.75
8. 私は人々を異ならせるものについて終始聞くことにうんざりしている。結局のところ、私たちは皆人類であるということを認める必要がある。	.58	.54
34. 文化における表面上の違いにも拘らず、人々は人間であるということにおいて基本的に皆同じである。	.83	.75
Eigen Value	1.74	1.41
内的整合性（Cronbach's Alpha）	.63	.41

6.「人間的類似性」Human Similarity Items

	青森	東京
6. 他の文化の人々は、あなたが「そのままでいる」のを好ましく思う。	.69	.61
22. すべての人々は、基本的には同じである。	.49	.73
51. 人々は同じである。私たちは同じような欲求、関心、人生における目標を持っている。	.68	.80
Eigen Value	1.18	1.54
内的整合性（Cronbach's Alpha）	.22	.52

7.「普遍的価値」Universal Values Items

	青森		東京	
	第一因子	第二因子	第一因子	第二因子
5. 地球上の全ての人々が究極的に責任を負うところの、当たり前で普遍的な価値観や規範がある。	.19	.95	.39	.75
12. ありがたいことに、私たちの根元は皆、超自然で神聖な存在にあり、この事が今日の世界における争いを解決する共通基盤となっている。	.85	.18	.84	.05
23. 私たちの根元は皆、超自然で神聖な存在にあるので、それ故に相違点よりも類似点の方がより多い。	.65	−.29	.40	−.73
59. 私たち全ては、超自然で神聖な存在にあり、このことが、人類救済の共通の基盤である。	.74	−.20	.82	−.04
Eigen Value	1.70	1.06	1.69	1.10
内的整合性（Cronbach's Alpha）	.59	(n.c.)	.55	(n.c.)

第四段階　「受容」Acceptance Scale

8.「違いの描写」Describing Differences Scale

	青森	東京
32. 個人主義により重きを置いている文化もあれば、集団で物事を行うことにより重きを置いている文化もある。	.88	.84
33. 人々は文化を優劣で語るべきではない。	.88	.84
Eigen Value	1.55	1.41
内的整合性（Cronbach's Alpha）	.70	.57

9.「違いを楽しむ」Enjoying Differences Items

	青森	東京
17. 私はだいたいにおいて、自分自身と他の文化の人々の間にある違いを楽しむ。	.79	.70
29. 他の国々に旅行するのは、世界の民族の間にある違いが見られるので良いことだ。	.70	.74

47. もし人々が違っているとしたら、それは問題ではない。それは面白いことである。	.64	.76
Eigen Value	1.53	1.62
内的整合性（Cronbach's Alpha）	.51	.56

10.「違いを学習」Learning Differences Items

	青森	東京
19. たとえそうすることが難しい時でも、他の文化の人々のものの見方に対して心を開き、彼らの目から物事を見るように努めなければならない。	.86	.78
27. 私は文化の異なる人々の価値観を理解しようと努める。	.86	.78
Eigen Value	1.48	1.25
内的整合性（Cronbach's Alpha）	.65	.36

11.「価値相対性」Value Relativity Items

	青森	東京
2. 善悪に対する基本的な考えのいくつかが文化によって違うのは、あって然るべきことである。	.82	.81
21. 他の文化の人々が、私の文化の人々とは必ずしも同じ価値観や目標を持たないのは、あって然るべきことである。	.72	.52
48. 善悪に関する基本的な考えのいくつかが文化によって違うのは、あって然るべきことである。	.86	.68
Eigen Value	1.91	1.39
内的整合性（Cronbach's Alpha）	.71	.38

第五段階「認知適応」Cognitive Adaptation Scale

12.「多重視点」Multiple Perspective Items

	青森	東京
31. 異文化的な状況を判断する時には、二つ以上の文化的なものの見方から引き出せる方が良い。	.72	.81
45. 私は二つ以上の文化の一員であると感じることには、利点があると感じる。	.72	.81
Eigen Value	1.04	1.31
内的整合性（Cronbach's Alpha）	.08	.48

13.「枠組み転換」Frame Shift Items

	青森	東京
3. 問題が起こった時、私はしばしばそれらの問題を二つ以上の文化的なものの見方から分析する。	.77	.77
25. 私は時には自分自身の文化における状況を、他の文化のものの見方から評価することを選択する。	.72	.77

46. 私は、自分が違う文化の考え方の枠組みを使っているので、時々周囲の人たちとは違ったふうに状況を判断することに気がついている。	.74	.79
52. 私は状況を解釈したり判断したりする時に、異なる文化の基準を用いる。	.62	.66
Eigen Value	1.96	2.20
内的整合性（Cronbach's Alpha）	.65	.72

14.「文化間の橋渡し」Bridge Builder Items

	青森	東京
18. 私は人々が自分の文化的価値観や習慣上の違いをよりよく理解できるよう手助けすることによって、文化の異なる人々の間に国際的理解を増すことにしばしば成功している。	.75	.74
24. 私は異なる文化の人々の間で、よく文化の架け橋としてつとめる。	.80	.81
53. 私は文化の異なる人々の間に起こる意見の相違において、しばしば文化的な仲介者としてふるまう。	.75	.66
60. 時に私は自分自身の文化における状況を、自分の他の文化での経験や知識をもとに判断することがある。	.52	.68
Eigen Value	2.02	2.10
内的整合性（Cronbach's Alpha）	.66	.70

第六段階「行動適応」Behavioral Adaptation Scale

15.「行動転換」Behavioral Shift Items

	青森		東京		
	第一因子	第二因子	第一因子	第二因子	第三因子
7. 私は権威や権力に対する自分の意見が、文化の異なる人々の見方とはなぜ違うのか理解している。	.35	.68	.26	−.06	.84
13. 私は、しばしば自分と他人とのコミュニケーションのとり方を、相手の文化的背景に合わせる。	.64	−.07	.52	−.33	−.52
42. 文化の異なる人々と、いろいろと違うやり方で、私はコミュニケーションできると感じている。	.50	.39	.47	.69	.14
50. 私は自分自身を一つの文化の一員であるとみなすと同時に、他の一つかそれ以上の文化において適切なやり方でふるまうことができる。	.49	.52	.40	.70	−.28
54. 私は文化の異なる人々といる時は、自分の文化の人々といる時とは違ったふうに行動する。	.55	−.61	.84	−.24	.10
58. 文化の異なる人々と接する時、彼らのやり方に適応するために、自分のふるまい方を変えていることに気づく。	.77	−.40	.83	−.25	−.01

Eigen Value	1.91	1.42	2.13	1.20	1.10
内的整合性（Cronbach's Alpha）	.55	.46	.63	.52	(n.c.)

16.「文化的複雑性」Cultural Complexity Items

	青森		東京
	第一因子	第二因子	
9. 私は自分自身の文化の一員であると感じてはいるが、他の一つかそれ以上の文化でも、ほとんど同じくらい居心地が良い。	.62	.57	.54
26. 私は主に自分を自分自身の文化の一員であると思っているが、他の一つかそれ以上の文化も自分の一部であると感じている。	.67	.48	.73
35. 私は自分自身を自分の文化の一員であると見ているが、同時に、他の一つかそれ以上の他の文化にいる時には、その集団の一員が考えるように自分が考えているのに気づく。	.74	−.42	.76
36. 異なる文化にしばらく暮らすと、私は無意識のうちに自分がその文化の人々とよく似たやり方でふるまっていることにしばしば気づく。	.69	−.52	.77
Eigen Value	1.86	1.00	1.98
内的整合性（Cronbach's Alpha）	.61	.55	.62

note: (n.c. not calculated)

5. 考　　察

本研究の分析結果が示唆していることは、IDIによる異文化感受性の測定について、日本人を対象とした場合、60項目の中には適用できない項目が含まれており、再考を要する点がいくつかみられたということである。使用に耐えうる指標として明らかになったものは、1)「隔絶・分離」、2)「侮蔑」、3)「優越」の三つである。ほかの指標には、日本人により適したものへと修正または改善されることが求められるであろう。上記の結果となった理由は幾つか考えられうる。一つには、「調査対象者が学生」という世代に偏ったためかもしれない。さらにもう一つには、対象者の地域性というものが反映したためかもしれない。いずれにせよ、今後は、多様な対象者を通じたさらなるテストが必要であろう。

IDIの日本人への適用性についての、この調査結果からは、IDIの6つの段階における各下位カテゴリーを測定する項目のうち、日本人にそのままで適用できるものと、修正か改善が必要なものがあることがわかった。このことはDMISを用いて日本人学生の異文化体験を分析したYamamoto（1994）の報告とも一致する。Yamamotoの調査では、米国に留学した日本人大学生への深層面接調査の内容をテキスト化したものについて、分類カテゴリーとしてDMISの６つの段階を用いて内容分析を行った。その結果、文化的違いについて言及していると思われ

る報告でありながらも、直接DMISの各段階の定義を反映しないために、分類のできないデータが残されてしまった。Yamamotoは分類できなかった報告については、新たに、文化的違いに関する7つのカテゴリーをデータより抽出した。結論として、DMISを日本人学生に適用した場合、そのままの定義では部分的にしか使用できないことと、どのように異文化感受性が表出するのかという点が、日本人の場合はDMISに記されているのと異なる可能性を述べており、日本人適用に際する修正の必要性を指摘しているのである。本調査の分析結果からも、自文化中心的段階の初期を測定するIDIの項目群は、そのままでも日本人にほぼ使用できることが示されたものの、他の段階、および下位カテゴリーについては、指標化の条件を満たすのに有効といえないことが示された。これらについては項目群から一部削除したり、差し換えることや、項目自体を検討し直す必要性のあることが示されている。本研究は各項目の有効性を確認したという点では意義がある。しかしながら、Bennettの異文化感受性の枠組みを日本人に適用するには、今後の更なる深い研究を要すということが言えるであろう。

本研究の限界としては、対象者が学生であることの偏りと地域性に加えて、日本語訳の影響が考えられる。原文にできる限り忠実に翻訳する努力がなされたが、表現のわかりにくいものが含まれたかもしれない。しかしながら、単に翻訳だけの問題でなく、質問の意味自体が文化的に理解できにくかった可能性もある。例えば「最少化」段階の「普遍的価値」では、項目12、23、59が「私たちの根元が超自然で神聖な存在」にあることの記述であるが、原文では「超自然で神聖な存在」というのは「spiritual being」であった。「スピリチュアルな存在」という訳も考えられたが、原文の意味に沿うためにBennettに確認した結果「超自然で神聖な存在」という訳にした。超越的な存在のもとで共通性を感じるという世界観は日本人の「最少化」段階の異文化感受性を適切に表しているかという疑問が残される。

同じ「最少化」段階の「人間的類似性」についても、青森と東京の両サンプルで共通して内的整合性が著しく低かったが、「普遍的価値」と同様に「相手と自分の文化的違い」を「大きな問題と感じない」とか「取りに足りない」と認識するときの状態や理由を説明する次元としては、日本人には有効でないことが考えられる。Yamamoto（1994）の調査では、「人類としての普遍性や主義・思想の普遍性が文化的違いを超越する」という、DMISの「最少化」の認識を示す報告が、日本人学生との面接でほとんど見られなかったという。しかしそれは、日本人学生が相手と自分は同じという前提を持たず、文化的違いを重視した認識と行動をしている、ということを意味しない。具体的事象に話しが及ぶと、彼らはこれまで言及していた「相手と自分の間にある違い」をあたかも忘れてしまったかのように、自文化の文脈でないと通じないコミュニケーション・スタイルや人間関係の考え方で振る舞っていながらも、相手にわかってもらうことを期待するような報告をしていたという。今回の調査結果から再認識されたことは、IDIのカテゴリーや項目が有効でないものについては、異文化感受性の発達段階を定義する次元として、日本人の文化的違いへのアプローチそのものが異なることを考慮する必要があるということである。また、どのようなことを「文化的違い」と捉えるか自体に違いがある可能性

を考えると、DMISおよびIDIに含まれない日本人の異文化感受性の次元を調べる必要が生じるであろう。

今後の課題として、学生以外を対象としたより大きなサンプル数でテストされることが必要である。また、本調査で有効性を確認できなかった項目群については、日本人を対象とした面接調査を行い、それぞれの発達段階において、その段階に異文化感受性の発達状況が位置付けられる、と判断される対象者からの報告をまとめて、項目化していく作業が必要である。これはIDI作成の初期段階で、HammerとBennett（1998）が対象者の発言を集めて項目化したのと同じ作業にあたる。今回の調査では、IDI日本語版の作成を視野に入れて日本語への翻訳も行ったが、日本人に有効に適用できるIDIの日本語版作成には、項目を翻訳するだけでは不十分なことが明確となった。それぞれの段階で何をどのように文化的違いとして捉え、どのような位置付けを行うかといった意味を日本文化の文脈から探り、それに基づく項目化が課題となろう。最後に、日本文化の中で異文化感受性を改めて考えるならば、日本人対象者が、何をどのように文化的違い、もしくは共通点として捉え、それらをどのように位置付けたり受け止めたりし、感じているのかを報告してもらい、そこからDMISには含まれていない意味と次元を明らかにしていく調査が必要となるであろう。

（2001年12月20日受理）

参考文献

青木順子（1999）『異文化コミュニケーション教育』、溪水社

Bhawuk, D. P. S. & Brislin, R. (1992). The measurement of intercultural sensitivity using the concepts of individualism and collectivism. *International Journal of Intercultural Relations*, 16, 413-436.

Bennett, M. J. (1986a). Towards ethnorelativism: A developmental model of intercultural sensitivity. In R. M. Paige (ed.), *Cross-cultural orientation: New conceptualizations and applications* (pp.27-70). Lanham, MD: University Press.

Bennett, M. J. (1986b). A developmental approach to training for intercultural sensitivity. *International Journal of Intercultural Relations*, 10, 170-198.

Bennett, M. J. (1993). Towards ethnorelativism: A developmental model of intercultural sensitivity. In R. M. Paige (ed.), *Education for the intercultural experience* (pp.21-71). Yarmouth, ME: Intercultural Press.

Bohrnstedt, G. W. & Knoke, D. (1988). *Statistics for social data analysis* (2nd ed.). Itasca, Illinois: F.E. Peacock Publishers.

Brislin, R., & Yoshida, T. (1994). *Intercultural communication training: An introduction.* Thousand Oaks, CA: Sage.

DeVellis, R. F. (1991). *Scale development.* Thousand Oaks, CA: Sage.

Hammer, M. R., & Bennett, M. J. (1998). *The intercultural development inventory: Manual.* Portland, OR: Intercultural Communication Institute.

Hammer, M. R. (1999). A measure of intercultural sensitivity: The intercultural development inventory. In S. M. Fowler & M. G. Mumford (eds.), *Intercultural sourcebook* (Vol. 2, pp.61-72). Yarmouth, ME: Intercultural Press.

林　吉朗（1994）『異文化インターフェイス経営』、日本経済新聞社

Kim, J. & Mueller, C.W. (1978). *Factor analysis.* Beverly Hills, CA: Sage.

Koester, J., Wiseman, R. L., & Sanders, J. A. (1993). Multiple perspectives of intercultural communication competence. In R. L. Wiseman & J. Koester (eds.), *Intercultural communication competence* (pp.3-15). Newbury Park, CA: Sage.

近藤祐一（1997）「異文化コミュニケーション研修」、石井敏・久米昭元・遠山淳・平井一弘・松本茂・御堂岡潔（編）、『異文化コミュニケーション・ハンドブック』、有斐閣選書

Long, J. S. (1983). *Confirmatory factor analysis.* Beverly Hills, CA: Sage.

Martin, J. N. (1993). Intercultural communication competence: A review. In R. L. Wiseman & J. Koester (eds.), *Intercultural communication competence* (pp.16-29). Newbury Park, CA: Sage.

マツモト, デーヴィッド（1999）『日本人の国際適応力』、本の友社

宮原　哲（2000）『コミュニケーション最前線』、松柏社

森　康俊（1997）「異文化コミュニケーション」、橋元良明（編著）『コミュニケーション学　への招待』、203-221、大修館書店

Ruben, B. D. (1989). The study of cross-cultural competence: Traditions and contemporary issues. *International Journal of Intercultural Relations*, 13(3), 229-240.

山岸みどり（1995）「異文化間能力とその育成」、渡辺文夫（編著）『異文化接触の心理学』、201-223、川島書店

山岸みどり（1997）「異文化間リテラシーと異文化間能力」、『異文化間教育』Vol. 11、37-51、異文化間教育学会

Yamamoto, S. (1994). *A qualitative study of Japanese students' intercultural experiences in the U.S. in relation to the developmental model of intercultural sensitivity,* Unpublished master's thesis, Portland State University, Portland.

山本志都（1998）「異文化センシティビティ・モデルを日本人に適用するにあたって: 再定義の必要性について」、異文化コミュニケーション研究会編『異文化コミュニケーション』Vol. 2、77-100.

八代京子・町恵理子・小池浩子・磯貝友子（1998）『異文化トレーニング』、三修社